

カムパネルラ

～カムパネルラとは～
宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

Vol.19 2010年11月号

- 家庭科教育の授業で紹介した絵本・・・堀口 美智子
- かばん、トランク、バスケット・・・藤田 博
- 展開の早い時代劇風絵本・・・秋場 文東
- 読み聞かせしてもらった思い出がよみがえるこの一冊・・・後藤 あや子
- 新刊紹介・・・藤田 博

家庭科教育の授業で紹介した絵本

堀口 美智子

「保育学実験・実習」の授業で、子どもの心情を理解してもらおうと、『おこだでませんように』を学生に読み聞かせます。この本を誰かに読み聞かせる時、私は涙腺をぎゅっと閉めねばならず、苦勞します。読むたび、不器用で失敗だらけだった自分の子ども時代を思い出し、我が子を頭ごなしに叱った親としての日々も思い出し、せつなさで涙が溢れてくるからです。



小学1年生の男の子の気持ちで書かれたこの本は、小学校教諭でもある著者くすのきしげのり氏の実体験が元になっています。著者は、たどたどしい文字で「おこだでませんように」と書かれた願いを見つけたとき、涙が出そうになったそうです。

読書感想文コンクールの課題図書にもなったので、ご存じの人も多いでしょう。「ぼくは いつも おこられる。いえでも がっこうでも...。/きのうも おこられたし、きょうも おこられてる。きっと あしたもおこられるやろ...。/ぼくは どないしたら おこられへんのやろ。ぼくは どないしたら ほめてもらえるのやろ。ぼくは...「わるいこ」なんやろか...。/ぼくは、しょうがっこうに にゅうがくしてから おしえてもらった ひらがなで、たなばたさまに おねがいを かいだ。ひらがな ひとつずつ、こころを こめて...。」(はしがき) 私たち大人は、子どもの個性の大切さを理解しつつも、一定のものさしで子どもを判断しがちで、こうした心の祈りに気づくことはあっただろうかと反省させられます。

大人に読み聞かせてもらう子どもたちは、主人公の気持ちに重ね合わせ、悲しくやるせない思いを共有し、最後の場面ではほっとした嬉しい気持ちになることでしょう。子どもだけでなく、大人の心をも強く打つ一冊です。

中高校生に親の深い愛に気づいてもらおうと『ラヴ・ユー・フォーエバー』を読み聞かせているとの家庭科教員の実践報告を聞き、「発達と保育」の授業で教材として紹介しました。が、涙なしにこの本を読み聞かせする自信がないので、タイトルのみ紹介しました。

本書は米国で話題になった絵本の翻訳版です。生まれたばかりの赤ちゃんを母親は抱っこして「アイ・ラヴ・ユー いつまでも/アイ・ラヴ・ユー どんなときも/わたしが いきている かぎり/あなたは ずっと わたしのあかちゃん」と歌う。赤ちゃんはやがて2歳になり、9歳になり、ティーンエイジャーへと成長するが、夜になると母親はぐっすり眠った子どもを抱っこして歌う。やがて母親も年を取り、老人になる。そして、息子は...



翻訳版なので、「アイ・ラヴ・ユー」などのせりふに違和感もあるうかと思いますが、「大好きだよ」などと言い換えて子どもに読み聞かせる人もいるようです。幼い子どもたちを抱きしめながら読む本としても、反抗期にある中高校生に親の思いに気づいてもらったり、これから親になる世代が子育てについて考えたりする教材としても、適しているように思います。子どもに注がれた愛は次の世代へと受け継がれ、永遠に命が繋がっていくものだというところに、改めて気づかされます。

「おこだでませんように」くすのきしげのり・作/石井聖岳・絵/小学館

「ラヴ・ユー・フォーエバー」ロバート・マンチ・作/乃木りか・訳/梅田俊作・絵/岩崎書店

(家庭科教育講座)

かばん、トランク、バスケット

藤田 博

「いさむ」と書いてある大きな黒いかばんがあります。「ぼくが あくびを したら・・・かばんが くしゃみを した」のです。「とびだした ものを あつめなくっちゃ！」折り畳みの椅子、鳥かご、ラッパ、ベルト、目覚まし時計、ビニールの花、一つ一つを拾い集めます。「でも まだ だあれも とりに こない。ねむく なっちゃった。」ここから眠りに落ち、ここから夢の中、そう見えていて、あくびをしたところから夢は始まると考えられます。夢の中に夢があり、夢の中の自分を自分が見ていることとなります。最後のページは、左手にかばん、右手にラッパを持った自分です。鳥かごとになった体の中には鳥がいます。鳥かごが自分か、鳥かごの中にいる鳥が自分かが問われることとなります。その問い掛けは、「『いさむ』って だれかな？『いさむ』って だれだろう？あれっ？」と一つです。ふなざきやすこ文・うえのりこ絵『いさむのかばん』(偕成社)の、かばんを通すことで見えてくるメタ的「私」の世界です。



大金持ちであった父の遺産を使い果たした男がいます。親切な友だちが古いトランクをくれます。「なにか入れなさい」、そう言われた男に入れるものなど何もありません。そこで自分がトランクの中に入ります。アンデルセン原作・角野栄子文・スズキコージ絵『空とぶトランク』(小学館)はそう始まります。トランクは空へと舞い上がり、トルコの国に。お姫さまに「わたしはトルコの神さまです。空をとんで、あなたに会いに来たのです。」と告げます。目を見つめて珍しい話をし、お姫さまを魅了した男は、結婚の約束をとりつけます。

お姫さまの両親を前に男の話が始まります。トランクに入った男の話す「空とぶトランク」の話、その中に「ひとたばのマッチ」の話が入る、入れ子の形となっているのがわかります。結婚式の前の晩、男はトランクに乗って花火を空高く打ち上げます。結婚式の日、男は飛ぶことができなくなってしまいました。トランクに残っていた花火の火の粉で、トランクが燃えてしまったのです。お姫さまは待ちつづけています、トランクが、トランクに入った男が飛んでくるのを。屋根の上で、今でも。



小沢正作・佐々木マキ絵『すてきなバスケット』(福音館書店)では、バスケット一つを持って、ぶたとうさぎがやってきます。お腹をすかせたオオカミの目の前で、キャベツが、ニンジンがバスケットから飛び出します。ぶたもうさぎも「ころんころん」しているのは、いつでもそうして食べることができるためなのです。「きゃべつと にんじんのうち ぼくが、どっちのほうをすきか わかる？」「にんじんと きゃべつのうち、あたしが どっちのほうを すきか、わかる？」うさぎが、ぶたがうなずいた途端、キャベツが、ニンジンが飛び出すのです。奪い取ったオオカミがバスケットをのぞいてみるのですが、「なかは すっからかんの からっぽ。」「それにしても おなか が へったなあ。」



食べ物の名前を二つあげ、どっちが好きかを尋ねる、「あつたあ」とうなずくと中から飛び出してくる「まほうのバスケット」、それに気づいたオオカミときつねは、「とんかつ ひやくまい」と「あぶらあげ ひやくまい」を口にするのです。

夢のような気分を味わったオオカミときつねは、バスケットを隠そうとします。「きのうえと のはらのうち、おれさまが どっちに かくすほうが すきか、わかるかな。」「のはらのほうじゃ ありませんか」とのきつねの答えに、オオカミがうなずいたことで、バスケットは野原のどこかにもぐってしまいます。「せっかく すてきな バスケットを てにいれたのになあ」、残念がるオオカミときつねの声が聞こえてきそうです。

かばん、トランク、バスケットに共通しているのは、中が虚であり、空であること。何も無いそこから空を飛ぶ奇跡が、油揚げが飛び出す不思議が生まれます。かばんが夢と結びつきやすいのは、自分がかばんを持っているのか、かばんが自分を持っているのかの境目が揺れてしまうからに他なりません。かばん、トランク、バスケットとは、そうした奇妙なものなのです。

ふなざきやすこ・文/うえのりこ・絵『いさむのかばん』(偕成社)

アンデルセン・原作/角野栄子・文/スズキコージ・絵『空とぶトランク』(小学館)

小沢正・作/佐々木マキ・絵『すてきなバスケット』(福音館書店)

(英語教育講座)

子どもたちは手裏剣遊びが好きである。附属幼稚園では、年中児が牛乳パックを切ったものを十字型にして手裏剣遊びをしている。「見て」とニコニコしながら手裏剣を見せに来る姿は、とてもほほえましい。年長児は折り紙で手裏剣を作り、「えいっ」と飛ばして遊んでいる。作り方を女兒が教え、男児が学ぶ光景もすてきなあとと思う。子どもにとって忍者というのは、それほどカッコいい存在なのだろう。

そんな遊びがあった時に、読み聞かせに適すると思われる一冊を紹介したい。『八の八の小天狗』だ。



いつものように、ハーモニカを吹きながら下校途中の「僕」とみすずちゃんの前に、突然、山の上から忍者の一団が現れる。驚く間もなく、「八の八の小天狗 みすず姫はもらいうけたぞ」と忍者が叫びながら切り込んでくる。あまりの展開の早さに驚きながらページをめくると、「僕」もいつの間にか八の八の小天狗になっているという、とんでもない話。（話が急すぎ）と思うかもしれないが、この時点で読者は忍者の世界に引きずり込まれているのだ。

忍者と小天狗の間で、「こいっ」「タァーッ」とすぐに戦いが始まる。まるで時代劇を見ている気分だ。いや、時代劇そのものだろう。恐れる姫が小天狗に寄り添う。小天狗は姫を助けようと立ち会う。が、忍者が姫に一撃を加えようとする。ピンチ！ところが姫も刀を抜いて危機をかわす。逃げる忍者たちを「待ていっ」と追いかける小天狗。するといかにも強そうな忍者の頭（かしら）が現れる。

「むふふふっ 小天狗やるな。」

この絵本では切られる描写が全くない、教育的配慮がなされている。そしてオノマトペが多く使われる。「シュッ」と手裏剣、「タァッ」とかわす。「ピュッ ピュッ」「カン カン」「とおーっ」「コーン」「シュッ シュッ シュッ」「カチーン」これらはすべてゴシックで書かれている。思わず読者も声を張り上げて読みたくなってしまう。

忍者の頭との戦いに話を戻す。手裏剣を嵐のように投げた頭は何と言うだろう。

「ムッ 手り剣がなくなった。」

これが上半身アップで描かれる。この間抜けな感じが面白い。
その後の展開は想像にお任せする。

「ドアーッ」「チェーイ」「チャーン」
「あっ 小天狗さま」「ボアーン！」「モアモア」

この絵本を読み聞かせると、幼児たちは食い入るように絵本を見ている。
そういえば私も、幼稚園児の時に手裏剣遊びをしたのを思い出す。作れなくて泣いた思い出であるが。小学生の時、修学旅行で白虎刀を買ってチャンバラごっこをしたことも懐かしい思い出だ。
時代劇ものの本に惹かれる私は、やっぱり日本人と思う。

「八の八の小天狗」 飯野和好作・絵／ほるぷ出版

(附属幼稚園教諭)

読み聞かせしてもらった思い出がよみがえるこの一冊

林 明子作・絵『はじめてのキャンプ』(福音館書店)

後藤 あや子

小さい頃、毎日、楽しみにしていたことがありました。寝る前にベッドで、好きな絵本を両親に一冊読んでもらうことです。目の前に広がる世界にいつもわくわくしていました。そうして読んでもらった数多くの絵本の中から、心に残る1冊を紹介したいと思います。



なほちゃんは小さな女の子です。おおきい子だけでキャンプに行く聞いて悔しくなったなほちゃんは、「わたしもいく!」と言い出します。なほちゃんの「はじめてのキャンプ」の始まりです。重い荷物運びに薪集め・・・小さいなほちゃんには大変な仕事ばかりです。それでも、なほちゃんはおおきい子に負けじと頑張ります。そして夜、みんなが寝静まった頃、なほちゃんはおしっこに行きたくなります。ともこおばさんに声をかけても起きてくれません。仕方なく一人でテントを出ると、外は真っ暗、虫の音が響いています。近くの草むらでおしっこを済ませたなほちゃんは、急に怖くなります。急いでテントに戻ろうするなほちゃんの目に何か動くものが。テントに入りかけた時には、髪の毛とシャツを誰かに引っ張られたような気が。夢中で逃げ込んだなほちゃんを包んでくれたのは、ともこおばさんの優しい声でした・・・。大自然に囲まれての初めてのキャンプ。絵本の最後には、様々な経験を通してひとまわり成長したなほちゃんの姿を見ることができます。

子どもの頃、家族でよくキャンプに出かけていた私には、夜、一人でテントを出た時の、深い森に囲まれた何とも言えないあの恐怖感がよく分かります。ここには、子どもの抱くそうした思いがよくとらえられています。絵が赤、青、黄、黒、白の5色で描かれているのも大きな特徴です。色使いがシンプルであることで、読み手が中身にじっくり目を向けられるようになっているのです。

大学生になった今、絵本を読む機会はなくなっています。久々に絵本を手に取り、時間をかけて読み返してみました。絵本の中身と共に、これを両親に読んでもらった時の様子が思い出となってよみがえり、懐かしい気持ちでいっぱいになりました。私が親になった時、先生となって生徒を受け持った時、自分がしてもらったように、たくさんの絵本を読んでやりたいと思います。

(教育心理学コース3年)

新刊紹介

井上洋介文・絵『ぎゅうぎゅうどうぶつえん』(芸術新聞社)

部屋とは、くつろぎ、安心できる場所、その部屋に突然、動物が顔を出したら。しかも、壁を突き破ってであったとしたら。次から次へと押し寄せのおまけまでがついたとしたら。時計の振子が、剣玉のひもが、切れんばかりに右に左に大揺れに揺れて当然です。天井裏のネズミが、右に行き、左に行きして当然です。

キリンは「ながいくび ぎゅうん ぎゅうん」、バッファローは「どぎゅ ぎゅ ぎゅ」、カバは「ぶほーっ ぶほーっ むぎゅ ぎゅーっ」、セミは「ぢぢぢ ぢぢぢぢ ぢっ ぢっ」、カブトムシは「がり がり がり がり がが どどど」、ゾウは「こどもつれて はな ぶらん ぶらん ぶらん」、モグラは「もぐ ぎゅう もぐ ぎゅう」、ヤマアラシは「けを たてて ばさ ばさ ぶさ ぶさ」、そしてバクは「ゆめみたら たべさせて」

キリンにバッファローにカバにセミ・・・、「ぼく」の部屋が「ぎゅうぎゅうどうぶつえん」になったのです。部屋に入り切れるはずがないなどは余計な心配。大きなものも小さなものもすべてが集まって、入り切れないものが入ってしまうのが「ぎゅうぎゅうどうぶつえん」だからです。部屋一杯の動物が、「ぼく」の手にする絵本から飛び出したものであることは、最後になってわかります。これが夢を食べるバクを登場させることと一つになって、種明かしの役割を果たしているのです。

井上洋介独特の奇想天外の世界がここに 있습니다。その意味では、この種明かしはない方がいいのかもしれませんが。「ゆっくり のんびり おさんぽ でんしゃ・・・かいだん のぼる かいだん でんしゃ ゆっくり みごとに のぼって いくよ」は『でんしゃえほん』(ピリケン出版)の世界、「ひぐれの町の 曲がり道 何が出るのか 曲がり道」は『まがれば まがりみち』(福音館書店)の世界。日暮れに曲がり道、二つが重なれば何が出てもおかしくない、何がどうなってもおかしくありません。ねじ曲がり、ワープする、すべてが驚きの異空間なのです。それを導き出しているのが「ゆっくり」散歩、「ゆっくり」くつろぐ部屋、日常世界に非日常世界の穴が開くのは、目的を持たない「ゆっくり」だからこそのものと言えるのです。

(藤田 博)

発行：宮城教育大学附属図書館